

住民の笑顔を照らす花火を、口上で盛り上げ伝える――

秋の訪れを知らせる、六合地区の道悦島八幡宮祭典。瀧本亮助さんは、祭りを華やかに彩る献発煙火の「呼び出し」と言われる口上の指南役を長年務め、新旧住民の親睦を深める夜を盛り上げています。

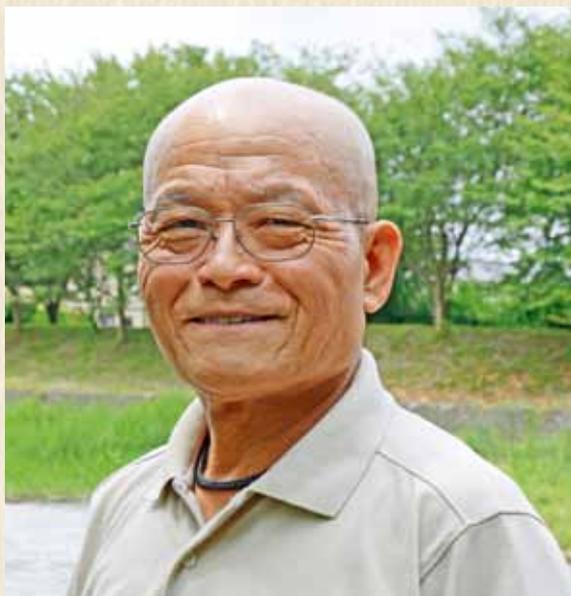


【祭りへの心意気を代弁】
「トザイ トーザイ…ゴケン パツ」花火の種類や奉納した人の名前を、ゆったりとした口上で紹介する「呼び出し」。瀧本さんは、20年以上に渡ってその指南役を務めてきました。

「子どもの頃から何千回と聞き、慣れ親しんできた伝統の節回し。それでも、声の調子を落とさないこと、名前の読み間違えには、気が抜けない。奉納してくれた人の心意気を台無しにしない、たぐないからね」と瀧本さんは話します。

かつては、地区内の空き地から打ち上げられた花火も、川内の河川敷が花火職人の現場。毎年、尺玉やスターマインなど100発の花火が打ち上げられ、各町内から選ば

【感動を共有する一夜】
景気の低迷や娯楽の多様化などにより減少する、奉納花火の数。瀧本さんは、今と昔の打ち上げプログラムを広げて見比べます。
「時代の流れもあるから仕



献発煙火の口上指南役
瀧本亮助さん（道悦一丁目）

れた住民が、祭りの賑わいから少しはなれたテントの下、交代で口上を努めます。その指導に当たる瀧本さんは長年、最初と締めと呼び出しを担当と共に、打ち上げの間隔にも気を配ります。

方ないかもしれないけど、やっぱり寂しいね。人口が急に増えた地域では、祭りは新旧の住民が親睦を深める貴重な機会ですよ。一夜だけでも、老若男女が同じ花火を見上げて一緒に感動する。笑顔を照

らす伝統の火を、できれば絶やしたくないね。だから、呼び出しは声こそ目立つが境内には居られない祭りの裏方だけど、境内から歓声が聞こえてくるだけで嬉しいよ」

【郷土愛の芽を育む口上】
引退を口にする度に「声の出る間は続けてほしい」と懇願する周囲に、苦笑する瀧本さん。その表情には、年齢の問題だけでなく、祭りを愛するが故の思いがにじみます。
「少しでも祭りを盛り上げる力になりたくて続けている呼び出しだけど、そろそろ後継者にバトンタッチしたいのが本音。新しい人がどんどん地域に関わって愛着を持たなきゃ、祭りは続かないよ」

祭りは準備に苦労する分、当日の笑い声が大きくなることを、新旧双方の住民に知ってほしいと願う瀧本さん。若い世代に指南役として自ら汗をかく姿を見せることは、祭りへの憧れや郷土への誇りの「芽」になるといいます。今年も、瀧本さんの威勢の良い呼び出しを皮切りに、夜空に大輪の花が咲き誇ります。



道悦島八幡宮祭典／9月13日(日)
夜打の部／午後7時30分頃から

◀威勢良く呼び出しする瀧本さん

Shimadajin File #61

